

昭和43年7月1日第3種郵便物認可  
平成23年7月5日発行(毎月5日1回発行)  
第51巻7月号(通巻624号)

# 風土



7

朴の花  
神蔵器

花楓一畳台目の茶室かな

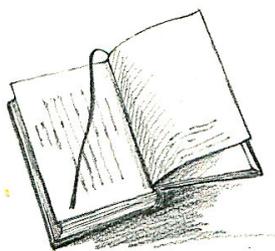
百千鳥横笛庵の蔀上ぐ

梅は実には瓢箪文様手水鉢

甲羅干す何れの亀の鳴きたるか

立札に時をぬすめり緑立つ

風の音水の音あり今年竹  
人ごゑの三々五々や花菖蒲  
桐咲けりはるかな波の押し寄せて  
さくらんぼ仏となる石なれぬ石  
太陽を呑まむと青き鷺の立つ  
木の股に明恵上人明易き  
朴の花まさをき空の三施かな



# 竹間集

同人作品



花曇り

鈴木とおる

安売りはせぬと浪人卒業す  
酒断つて夜の長さや目借時  
酸素吸ひ「眠る」と春の別れかな  
妻と子の逝きし病院花の中  
春の野に仕事納めの物を焚く  
リラ咲いて最果ての地に着任す  
花曇り一人の飯の炊き上る

風光る海

外川玲子

陸前高田の海を思ふ  
風光る海抱きしめてをりにけり  
阿弥陀寺に春が来てをり法話聞く  
箱根玉木の浦路の空深く咲き藪椿  
峠まで雲降りて来し野焼あと  
春嵐掟のごとく山を抜け  
星紡ぐやうに河骨黄をつむぎ  
日暮れくる倉敷川の柳かな

青時雨

山田暢子

思ひみな散文に似て桐の花  
午前午後ゆつたり過ぎぬ花菜漬  
紫陽花や箱根細工の秘密箱  
遠出もう出来ぬ齢や風薫る  
桐咲くや地震に崩れし父の墓  
父を知るひとに遇ひけり青時雨  
囀りやこの辺りより漁師町

蝮の道

門伝史会

野を渡る学校放送蝮の道  
集まれば地震の話に桜餅  
花冷えの余震ごもりとなりにけり  
風光る置き替へてみる文机  
十石舟かつての岸や川柳  
頤を人みな空へ紅しだれ  
紅しだれ胸の内まで染まりけり

「淡交」以後（三十一） 野沢しの武

大寒の花舗の一隅鉢売場  
誰もぬぬスケート場を月照らす  
寒満月雪吊は影低く立つ  
遠き日を連れて友来る春隣  
拝殿に「落雪注意」鬼やらひ  
真冬日にして立春の胡桃の木  
雪割つて道掘げたり建国日

花の雨

鈴木 石花

春昼の地震千年の多胡碑揺れ  
鬱の日々前と後ろの山笑ふ  
目借時太極拳の曲流れ  
花時の赤坂シャンソン慈善シヨウ  
全盲の親友失せし花の雨  
風光る右が左にスカイツリー  
ジヨギングの先々揺るる諸葛菜

みちのく忌 山路 紀子

秋篠に秋篠川や葦草  
三月の伎芸天女のうれひかな  
みちのくに田打桜の咲く頃か  
はこべらよ童よ陸前浜街道  
春北風やベクレル・マイクローシーベルト  
身にいつもある揺れ蛙の目借時  
金銀の鯉が水面に仏生会

ははの手紙

— 浜 福恵 —

三年を一人静の花殖ゆる  
但馬路は谷間の里の辛夷咲く  
里は閑かに早瀬を鮎の上りくる  
盛りなる坂の一本桜かな  
一番奥の家の子なりしつばくらめ  
坂の桜丘の桜や空へ散り  
急峻の若<sup>わか</sup>杉<sup>かす</sup>峠やほととぎす  
天边は県境にして栃の花  
河鹿鳴くなぜか親なき子のやうに  
風入れてははの手紙のをとこ仮名

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

風光る脚を延ばせし本籍地  
燕来るオルゴール館の赤煉瓦  
母の間に薫風充たし待ちにけり  
梅は実に空の涙のこぼれさう  
足早に僧のよぎりぬうすごろも

林いづみ

金雀枝や遠藤周作講座の灯  
竹の子の元服の日を待ちにけり  
もてなしに山菜七種日永かな  
棘持つは自愛のあかし穂芽摘む  
通院に日日好日や木の芽和

安永 圭子

奥田 茶々

竹の秋東西南北寺の門  
行く春や鏡の前のバレリーナ  
とろとろと春をかき分け十石舟

神苑の池に下り来る朧月  
囀りを入れし厨の水仕事

間島あきら

花一片届いてゐたる机かな  
石流れ木沈むこの世雀の子  
春禽の集ひて空を奪ひ合ふ  
蛙塗つて空新しくなりにけり  
雲に楽低く流るる仏生会  
広重の小金井桜歩みけり  
武蔵野に日の回り来て遅桜  
浅草の終点は花スカイツリ  
花疲れ莫塵の端少し貫ひけり  
牡丹の鉢の一つを寺の門

竹久みなみ

◇特別作品抄◇

## 多摩川

内藤

静

玉の名をいたたく川や夏近し  
うぐひすの武蔵御嶽の社かな  
育つ杉あたらしき杉風ひかる  
若葉して神ほど古き櫛かな  
御開帳護摩の火屑をありがたく  
山つつじ山伏なれば火を走る  
満天星咲く墓や人間探求派  
安息は万緑のこの静寂こそ  
堰までの水の平らに雲の峰  
多摩川の流れつづける夕焼かな

# 風土独語／神蔵器



花冷やあをみて見ゆる盧舎那仏

上辻 蒼人

私は掲句を一読した時、直ぐに思ったのは、唐招提寺金堂の盧舎那仏であった。しかし蒼人さんの句は東大寺大仏殿の盧舎那仏であるようだ。唐招提寺の場合はより親しみをもてて大変よいのであるが、景が多過ぎることと、仲秋の名月の観月の讚仏会の日ぐらいで一般の参拝者は金堂の中に入れない。一方東大寺の方は大仏殿の中に誰でも入れるということ、これはきわめて大事なことである。仏の四つのグループのうち盧舎那仏、つまり如来の役割は「慈」にあり父親のような厳しい愛情である。菩薩は「悲」何でも聞いてくれる母親のようなやさしさ、明王は火の中で泣き叫ぶ子供を必死に助けようとする強烈な慈悲、そして天部は仏法の守護神といわれる。

舎那仏の台座の蓮弁一枚一枚には蓮華蔵世界の物語が線彫され、光背には如来のお姿が十六体ついている。しかし盧舎那仏ご本体は、お釈迦様が悟りを開いた時の姿のまま質素な衣をまとっただけで装飾品など何も持つてはおられない。

作者は大仏殿のお堂の中に入った時、堂内はひっそりとして少し冷やかさを感じた。それは作者が外から持ち込んだ花冷えであったようだが、作者が花冷えを意識する前に盧舎那仏は花冷え

を感じておられる。「あをみて見ゆる」はもともと青銅製であり、しかも長い歲月を経ているので視覚的にはあたりまえのことであるが、作者はそんなことを言っているのではない。作者は盧舎那仏と同じ空気を吸い同じ花冷えを感じておられる。仏の身体から放たれる化仏は堂内に充ち、仰ぎ見るお姿から慈愛の心が溢れている。東大寺の中門と南大門との間の木立の中に秋艸道人（云津八一）の歌碑が立っている。

おほらかにもろてのゆびをひらかせて

おほきほとけはあまたらしたり

ファンファーレ奏つるやうに花辛夷

森屋 慶基

北上線は岩手県北上から秋田県横手間を和賀川、湯田ダム湖などに沿って進み、奥羽山脈を横断する。四月も下旬頃からであるうか、ようやく雪は消えて、雪解水で増水した川の対岸の雑木山は、まだ芽吹かず、枯れ一色の中に、反故を投げたように真白い花が点々と眺められる。総べて辛夷の花である。

作者の横手地方では辛夷の花は田打桜とか種子蒔桜と言っている。辛夷の花が咲き出すと種籾を出して水に浸したり、今は主に機械植えて自宅の近く、庭先などに一定の苗箱に種蒔し育苗をするが以前は田の一枚を苗代とした。それやこれや長い冬が去って辛夷が咲き出すとそれを合図に農家はいつせいに仕事を始める。

慶基さんは現役の消防官、けいじさんが亡くなってからは父親の農業を引き継いで広い田畑と林檎山の経営をして来た。一人三役、春の訪れは誰よりも強く待ち望み、そして新しい希望、挑戦に胸を躍らせている。辛夷の花はまさに春の開幕、ファンファーレは野にも山にも高らかにひびきわたった。（以下略）

# 風土集



## 神蔵器選

山門を覆ひて染井吉野咲く 五條 上辻 蒼人

花冷やあをみて見ゆる盧舎那仏

佐保姫も来て満開の佐保堤

夕さりや菜の花明りまだ黄なり

鳥帰る桜前線待たずして

四月来ぬ雪をはなさぬ田畑かな 横手 森屋 慶基

国一つ埋もれてをり涅槃雪

真つ先に残雪黒く昏れにけり

山笑ふ仙台箏筒の飾り鍵

ファンファール奏づるやうに花辛夷

千金のたんぼへ兒を放ちけり 岡山 高村 令子

一つ覚え二つ忘れて更衣

塔凌ぐもの無し回る白日傘

みづうみは大き日だまり鳥帰る

兒の夢の中まで伸びるチューリップ

夢殿へ一直線に初燕 川崎 豎山 道助

略歴は三行で足る蜷の道

龜飼つて鳴くまで待てり四月馬鹿

佇むも歩むも落花しきりなる

黄沙降り「元朝秘史」の終講す 舞鶴

目立て屋の在りし辺りや柳萌ゆ 山本 町子

ものなべて手の届く距離春炬燵

杉箸の柁のうす紅利休の忌

艦船の交はず汽笛も臍かな

雀の子とんとん干飯啄めり

二時四十六分止まりしままに辛夷咲く 須賀川 国分 千恵

仮住ひ「これもありよ」と黄水仙

玄関に桜一枝寓舎かな

被災樹にいつもの春の訪れぬ

キャンバスとなりし窓より山笑ふ